この生命ある限り

大石邦子

この生命ある限り　定価 380円

昭和43年9月25日　第1刷発行

著者　大石邦子
会津若松市山鹿町竹田綜合病院内
郵便番号965

発行者　野間省一

発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽2－12－21
郵便番号112
電話　東京942－1111（大代表）
振替口座東京3930

印刷所　株式会社常磐印刷所

製本所　有限会社大光堂

© Kuniko Oishi 1968
PRINTED IN JAPAN
★落丁本・乱丁本はおとりかえいたします

NDC 914　18.8 cm

はじめに

私には文章を書く才能なんてほんとうにありません。私が、何か書いてみたいと思うようになったのは、私の麻痺の病勢が、左半身だけでなく、右足にもまわってしまい、いま私に残された機能は右手一本だけだと知ったときでした。その右手すら、いつ麻痺が及んでこないともかぎらないという不安は、とてもおそろしく、哀しいものだったのです。

この手記は、主治医の菊井英進先生にすすめられ、短歌を教えていただいて、心のなぐさめを得るようになってから、書いてみる気になったものです。ですから、ただ自分の体験したことだけを、恥をしのんで書いてみたにすぎません。

菊井先生が紹介してくださった短歌同人誌「梢(こずえ)」に、私のつたない短歌が二首載りました。その活字を見たとき、私は、うれしくてたまりませんでした。

ひとり臥す夜の個室よ健やかにありし記憶はわが身引き裂く

友の子はわが胸無心にまさぐりつ女に生まれわれは嫁せぬ身

こんど、私のこの手記が一冊の本になることが決まったと知らされたとき、私ははじめて〝生きていてよかった〟と思いました。

私は、〝不治の病〟を宣告されましたけれど、〝死〟を宣告されてはおりません。〝死〟は私の

なかのひそかな切なる願望になっているのです。けれども、この生命続くかぎり、生の証を求めて、私は、私に残されたわずかな機能でも、その極限のぎりぎりまで、いきいきと、生かしていきたいと希うようになりました。

くちなしの匂う闇夜の病床に声つまらせて父母の名を呼ぶ
大部屋にひとり眠れぬ夜のありて思うは母亡きのちのことのみ

私には、決して長い人生が待っているはずはありません。いまの私に、幼い日々、青春の日々の思い出ほど、美しく哀しいものはありません。私は思い出とともにのみ生きているのです。

しかし、いま心静かに考えてみますと、全国に百万人以上もの身障者（十八歳以上）の方がおられるのです。みんな歩きたいのです。働きたいのです。身をきりきざむ思いで、切実に、社会に出ていきたいのです。

「みなさん、私と同じ苦悩に生きる私のお友だちのみなさん、みんなで、自分の限界をつくし、最後の力をふりしぼって、強く、強く生きていきましょう」

私は、この一冊が世に問われるにさいして、真っ先にみなさんにこう呼びかけたいと思います。私よりもっと長い闘病生活を送っておられる方、もっともっと重症の方がいらっしゃると思います。私のこのつたない手記が、傷つき、病んだ、多くの方々に、少しでもなぐさめや励ましとなり、社会のお役に立てるなら、私にとってこんなうれしいことはありません。

昭和四十三年八月二十日

大石邦子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

目次

はじめに

第一章　神あらば

神あらば……九
忘年会の夜に　10
お母ちゃんはガンだ！　14
大事な母の手術　19
病床の母につきそう　25

黒い影……三一
病院から会社勤め　31
母のひたい　32
ついに私も入院　35
母はお先に退院　37
亜急性甲状腺炎および貧血　38
ガタコト・クーチャン　40

先生、家へ帰して！　42
わが家の幸せ　44
再び会社へ出勤　45
新しい晴れ着……四八
お祝いと秋祭りをひかえて　48
ひとときのまどかな夜　50
ふたたび母の入院　52

第二章　青い実は落ち

青い実は落ち……五八
バスの急ブレーキで　58
〝私の足がない！〟　59
針で射してもハンマーでたたいても　61
耐えがたい導尿の苦しみ　62
屈辱の涙にくれて　66
何が悪いの？　だれが悪いの？　68
やさしい白衣の人　69
インターン生は大きらい！　73
先生は一人でたくさん！　75

慶チャンのこと……七七
慶チャンという青年 77
中沢教授の診断 78
ありがたい〝0〟のメンバー 80
回想のわが青春よ！ 78
出光の誇り、出光の心 85
〈入室お待ちください〉のふだ 88
母を呼びつつ 90
心のうずき 93
母の病状その後 95
やさしい父の心 96
心ない人の一言 100
東京オリンピックもうつろに 101

第三章　死を見つめて

死を見つめて……一〇六
一つの試み 106
なぜ彼は毎日くる？ 113
看護婦のなかの母性 117
私の仕組んだ見合い 118

脳の検査の苦痛 120
兄の結婚式の日 122
最悪のお正月 123
病院近くの火事 124
個室に移って 125

痛いのはなおるしるし……一三八

同じ苦痛の友サキ子さん 128
春遠からじ 132
アサツキラーメン 135
やさしい檜原湖の少年 137
母からのたより 138
リヒカのお城 140
椿博士の診察をうけて 142
ぶどう酒事件 146

第四章　生きるよろこび

私も立てる！　歩ける！……一五〇

ギプスの足との戦い 150
内科から整形外科へ 155
何ごとも訓練しだい 162

サキ子さんの昇天 165
鶴ケ城天守閣の夜景 167
止まらない鼻血 170
六人べやに移って 172
突然高熱に襲われて 178
昏睡のなかの夢 179
わが家でのお正月 183

怒りをおさえて……一八七

〝ヒステリー発作〟 187
中学の恩師の励まし 184
いまさら心因性とは！ 191
精神科受診 196

第五章　愛する哀しみ

別　れ……二〇四

慶チャンの転勤 204
愛子さんまでも 209
鶴ケ城のお花見 210
十四歳の少女の願い 213
母校へいく 218

父までも、また母も　225
第四領域症候群……二三〇
宣　告　230
真珠の指輪　238
右足にまで麻痺が　242
慶チャンの婚約　245
百五万人の一人として　250
私のカルテ　251
あとがきに代えて

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

第一章　神あらば……

元気に会社へ通っていた頃

神あらば……

忘年会の夜に

昭和三十八年十二月、会津(あいづ)では珍しくまだ雪のない十二日の夜だった。市内の料亭の一室で、チリなべ料理をかこんで、会社の忘年会がひらかれた。

私は、お酒好きの父に似ず、アルコールにはとても弱いほうなのに、せっかくのチャンスだし、好奇心も手伝って、飲んでみた。私たち女子が参加できる宴会なんてめったにない。それに、所長はじめ日ごろ机をならべ、お互いに助け合って仕事をともにしているみんなが飲むのに、私だけが飲めないなんてと、おチョコに十パイぐらいも飲んだだろうか？　ふと、ほおのほてりを覚えた。

トイレに立って、鏡のなかの私の顔を見てびっくり。いくどもいくどもうがいをし、縁先に立

ったまま風に吹かれ、やっとほおも冷たくなったので、宴席にもどった。みんなはまだ飲んでいた。前よりいっそう座はにぎやかになり、三味線の音につれて唄が流れ、所長によりそう色白の芸者が飲みほすコップ酒を、私はあっけにとられて見つめていた。やがて所長は芸者をのがれて私たち女子席へきて一席弁じだした。お得意の〝出光ぶし〟つまり人間尊重論とわが出光精神について……。

九時すぎ、会津磐梯山の唄と踊りで和気あいあいのフィナーレとなり、私たちは若い男性社員に誘われて二次会へ。

「年に一度の忘年会だ、みんなたのしくやりたまえ、ぼくは帰る、女の子をよろしく頼んだよ」

所長は切りあげのいい人だった。女子三名、男子六名はすっかりご機嫌になって、バーへとハネをのばした。私はそこで、生まれてはじめて男の人とダンスをした。ダンスといっても形だけ、リードされながら踊る私の足が、どうも思いどおりに動かないのは、やはりはじめて飲んだジンフィーズのせいだったのだろうか。

時計は十時をまわっていた。「あすがあるから……」といって、私たち女子はタクシーで帰路についた。タクシーはわが家の門の前で停まった。あかりが茶の間だけからもれている。忘年会とはいってあったけれど、まさか、お酒を飲んで帰るとは、父母は夢にも思っていないだろう。当時ボーイフレンドは何人かいたけれど、いつもコーヒーでの語らいだった。私はしかられるのを覚悟して、静かに玄関の戸をあけた。父が帰っていないようにと祈りながら、いくども深呼吸

をして、家に入った。
「ただいま……」
そのまま自分のへやへいこうとする私に、
「邦子」
「はい」〝だめだ！〟と思いながら、私は茶の間の戸をあけて、ちょっとだけ顔を出した。母は私のほうをふり向かずに、せっせと縫い物をしている。
「こんなにおそくまで何縫ってんの？」
「うん、ちょっとね」
しかられるのを覚悟していた私だった。
「……」
私は、お酒なんか飲んできて悪かったと思っていた。
「お母ちゃんあす入院すっからね、たのむよ……」
ハッとした。
「入院？　どうして？」
「たいしたことはないんだけど、入院したほうがいいっていうから……」
「病気は何なの？」
「……」

私はびっくりして母の前にすわりこんでしまった。
「ねえ、なんの病気なの？」
「大丈夫だよ、あしたが早いんだから、もう寝なさい」
全然からだを動かさないでいる母、その母の針をもつ手がふるえているのを、私は見落としはしなかった。あんなに丈夫だった母が病気なんかになるはずない……なんだろう、何かある……私は急に胸さわぎがしてきた。
「お父ちゃんは？」
「まだ帰らない……さ、早く寝なさい、あす早いんだから……」
心なしか母の声は沈んでいる。娘の私にはわかるのだ。ちがう、ふつうの母とちがう。
「どこへ入院するの？」
「竹田病院にしよう」
「ついていくか」
「うん、そうだね、……休めるか？」
「休めるよ」
母はもう涙ぐんでいる。こんなに急に気の弱い母……何かあったのね、とたんに私は緊張した。私は、入社して、祖母が死んだとき三日休んだ以外はまだ一日だって日曜祭日以外に会社を休んでいない。事情を話せばきっと所長は許してくれるにちがいない、私は、身勝手にもそう思

ったのだ。

お母ちゃんはガンだ！

「晃ちゃんにも電報うつか？」

私はすぐ東京の姉を思い浮かべた。どんなにびっくりするだろう。

「いいよ、心配ない。じゃ、あすついていってぐれるか、やはりお父ちゃんだけではね……」

いくら聞いても、〝たいしたことない〟の一点ばりで、病名をいわない母。しかたなくはげしく胸うつ心をおさえて自分のへやへ入ると、もう私から、忘年会のうわついた気分はかき消えていた。妹の芳子はもう寝床のなかにいたが、私は妹に母のことをいうべきか、迷った。頭からすっぽりふとんをかぶっていた妹は、私がへやへ入ったのを知ってか、寝返りをうってむこうを向いてしまった。帰りがおそかったのを怒っているのだろう……。

「芳子、寝たの？」

そっと聞いた。

「ウウン、寝てないよ」

声がかすれている。

「どうしたの、その声、カゼひいたナ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c